

## 銭屋五兵衛と抜荷

深井 甚三

ZENIYA GOHEI（銭屋五兵衛）and the Contraband

Jinzo FUKAI

キーワード：海商，抜荷，銭屋五兵衛，加賀藩，北前船

Key words：sea marchant, contraband, ZENIYA GOHEI, Kaga clan, northern country ship

### はじめに

加賀藩領そして加賀国の抜荷研究は専ら銭屋五兵衛を対象とした研究として行われ、鏑木勢岐氏の研究を代表に五兵衛の密貿易による抜荷実行説が支配的な見解となっている<sup>(1)</sup>。近年では遠藤雅子氏が銭屋五兵衛の土地があったとされるタスマニアの文書館に保存されている捕鯨船の航海日記をもとに、銭屋五兵衛の海外交易を主張する研究も登場している<sup>(2)</sup>。しかし、これも直接に銭屋五兵衛による密貿易を示す史料をもとにしたものではない。その後、2001年に銭屋五兵衛没後150周年となり、記念シンポジウムが金沢で行われ、彼についての関心が改めて高まることになった<sup>(3)</sup>。しかし、結局のところ銭屋五兵衛による抜荷は明確な史料が残存しないために完全に実証されたわけではなく、史料がない点を重視した否定説も一部に存在するのが現状である<sup>(4)</sup>。

しかし、密貿易・抜荷の直接の史料が残らないからといって密貿易・抜荷取引がなかったと簡単に結論づけられるものではない。そもそも抜荷取引の史料は当然ながら当初より残されることなどなく、残すものもそれとわからぬように作成されるものである。

加賀の隣国，越中伏木の廻船長寿丸の天保9年（1838）から翌年の航海と取引の概略が詳細に報告されているが<sup>(5)</sup>，それによるとこの廻船は蝦夷地・大坂間に加えて九州島原へも航海し，同年12月に島原で米150石のみを買い付けて翌年2月には江差に入津していることが紹介されている。薩摩藩領に近い九州の島原へ航海しながら米だけ購入したものか疑問が当然に起こる。この船は島原で米だけ買い付けて江差へそのまま向かったのかもしれな

いが，抜荷を志向する廻船ならば，島原は薩摩に近いので薩摩へ向かい，あるいは島原近辺で抜荷品を買い付けて，蝦夷地へ向かう前には途中新潟などへ寄ってこれを売却し，さらに蝦夷地へ向かい昆布・俵物を買付けてまた新潟へ向かうというような活動することになる。こうした取引をする船の場合ならば，当然ながらこれをそのまま帳簿に記載して残すことにはならないのである。

嘉永5年（1852）に河北潟に流された毒で沿岸農民に死者が出た一件で同潟の干拓を行っていた銭屋五兵衛家の当主や隠居していた五兵衛も捕縛され，五兵衛は牢死した。この時に藩は調査のために役人を東北へ派遣することになったが，その際に銭屋五兵衛家は次のような書状を津軽方面の最有力の取引先であった滝屋へ送っている<sup>(6)</sup>。

（前略）其御答ニ当時北国筋取引，南部・津軽両国在物・延うり代，かし付取替金残り共，極凡之所七千両計之見図り与御答申上候所，先夫ニ而御用済ニ相成申候，左候へハ，右之見図を以，御国・南部江御役人御指向之程も難計奉存候間，此度慶喜丸友取七郎右衛門指上申儀ニ御座候，宜敷御聞達，同人へ御相談之上，貴店様御指引帳御取直し可被下候・・・

上記のように，銭屋五兵衛家は取引を記載した帳簿の書き換えを滝屋に求めている。また，この手紙には「一，下店呉服方左八郎名前之分ハ，帳面相隠シ御上へ出不申候間，地白・小紋類等都而呉服方下し物ハ不残」省くように願い，また帳面で具合の悪いところがあれば，「去春御地焼失之節代呂物焼申事ニ被成下度，此段奉願上候」との記載もあるなど，五兵衛家が帳簿隠しに加えて改竄の依頼をしていることがわかる。このような事実は，当然に同家に抜荷取引があれば早速にその関係史料の隠滅や記録改

窟を示すものである。かくして錢屋五兵衛に関する抜荷取引の実態を直接の史料で解明しようとしても、錢屋五兵衛家の史料からは容易ではないことがわかる。しかし、日本海地域の、また加賀藩領で抜荷取引を行っていたとされている代表的な海商について密貿易や抜荷品取引を検討しないですますわけにはいかない。

従来の錢屋五兵衛の抜荷に関する研究は、海外密貿易を重視して、国内での抜荷品取引に関しては十分に検討してこなかった問題がある。そこで本稿では海外貿易についても検討するものの、これまでの錢屋五兵衛の研究が検討してこなかった薩摩藩が主導した抜荷取引について、とりわけ文政8年(1825)頃よりその取引を増大させた日本海地域への抜荷品移出と昆布・俵物確保について錢屋五兵衛との関係の考察を可能な限り行うことで五兵衛と抜荷取引の問題を検討したい。

なお、錢屋五兵衛の経歴や稼業の展開の概略はすでに鐮木氏により丹念に明らかにされているので、本論に入る前に予め氏の仕事に従って簡単に紹介しておくことにする<sup>(7)</sup>。五兵衛は安永2年(1773)11月に金沢の外港宮腰の質商に生まれ、文化8年(1811)に父が亡くなり満38歳にて同家を継いだ人物である。同家はかつて廻船業も行っていたことがあるが、五兵衛はまだ父が存命中のこの文化8年2月に質流れとなっていた廻船を修理して海運業に進出し、また翌年に材木問屋も務めるようになった。そして、文政8年(1825)より天保5年(1834)の間は能登輪島町の久保屋喜兵衛と共同で会津藩と塩・蠟の取引事業を行っていった。そして、この文政8年以降に錢屋五兵衛家は廻船所有を拡大し、経営を急速に成長させていく。同家が新造したり買い付けたことがわかる廻船は、まず文政9年に輪通丸650石の共同所有、翌年の輪吉丸550石新造と栄宝丸120石買い付け、そして同11年に弁才丸230石買い入れ、文政13年の宝錢丸890石新造、天保2年の宝得丸780石新造、翌年宝応丸800石新造、天保4年2人乗り廻船の買い付けが知られるという具合である<sup>(8)</sup>。その後も廻船所有を拡大させていくが、文政9年以降に着々と廻船所有を拡大しているように、経営を発展させていたことがわかる。この結果、天保末年に加賀藩御用を務める御手船裁許を務め、藩の御用海商として活動していくが、嘉永5年(1852)の河北瀉一件で破綻することになったのである。

## 一、対外交易について

### 1、鬱領島・タスマニアでの取引

#### ア、鬱領島

錢屋五兵衛の密貿易についての代表的研究の鐮木氏の研究では鬱領島(当時、竹島と呼ばれる)・タスマニアでの取引が問題にされている<sup>(9)</sup>。鬱領島での錢屋五兵衛の取引の存在については、複数の典拠が示されている<sup>(10)</sup>。まず第1は五兵衛が漂流してたどり着いた無人島がこの島で、米国船に救助された際にこの島での取引を約束して以降ここで取引をしたとするものである。ただし、この漂流一件は直接の史料が示されていないので、評価しがたい。第2は明治13年(1880)に前田家編纂方が元改作奉行石黒賢三郎から聞き取ったものである。この聞き取りは五兵衛關所の際に舶来品が多数所持されていたことを認め、近頃は鬱領島での抜荷取引が問題にされているものの、取り調べの時は同島での取引について確認できなかったとしている。鐮木氏はこれをそれとなく鬱領島での密貿易を暗示したものとし、朝鮮近海での異国との取引を考えるべきと述べている。いずれにしても、これも同島での取引を確認したものではない。

朝鮮国により空島とされ、幕府も渡海禁止にしていた鬱領島が抜荷の舞台になっていたことは、天保年間に幕府により摘発され、藩の転封なども伴う大がかりな処分が行われた浜田藩の海商今津屋八右衛門の竹島一件から推論されている。すなわち、この一件を東京大学図書館蔵「竹嶋渡海一件記」や国会図書館蔵「石州松原浦無宿八右衛門一件」「御仕置例類集」その他の史料により綿密に調べた森須和男氏は、幕府が禁制の島へ渡海したことを処分対象としているものの、藩関係者以外の処分対象に資金提供と商品販売にかかわった大坂商人も存在したことなどから竹島の産物だけでなく抜荷品の取引、つまり密貿易が行われたことを推測し、また前記の重要史料を翻刻している<sup>(11)</sup>。なお、森須氏によると、天保7年(1836)3月に棚倉に転封された藩主松平康爵の父康任は竹島一件の前年9月に仙石騒動で失脚するまで老中を務めており、また同家が將軍の正室の生家島津家から嫁をもらっているという島津家薩摩藩との緊密な関係も氏は明らかにし、老中失脚が間宮林蔵の摘発を契機とした竹島一件を生み、転封の処分となったことを考えている。つまり、仙

石騒動による老中職失脚がなければ林蔵による摘発も取り上げられず、薩摩藩同様に放置されるか、取り上げられても穏便な形で済まされたのではなからうか。

前記のように幕府の八右衛門らへの処分が渡海に限ったものであるため、これを重視すれば同島での八右衛門の密貿易は否定されて、問題は簡単に解決するが、それでは真実から遠ざかっていくように考えられる。すなわち、次の重要な問題が残されているからである。まず第1に、浜田藩が鬱領島への八右衛門渡海を容認し、また実際に彼の廻船が渡海していたのは明白であり、さらに大坂商人等もこの渡海への資金提供していたことを考えると、渡海目的が鬱領島の材木・海産物入手では<sup>(12)</sup>とても経済面や発覚した際リスクに見合うものではない点がある。第2にこの一件の直接の摘発契機となった間宮林蔵が浜田で確認したとされる品物が海産物・林産物とするならば、これらが他の島と異なった鬱領島の物品と確認できるはずなどはなく、やはり一般に考えられているように浜田で取引されていた唐物など抜荷品でなければ、藩の転封を伴うような渡海一件の取り調べに幕府が持ち込めるはずがない点がある。そして、この天保年間の同十一年に新潟の抜荷探索を行った幕府御庭番川村修就が作成した著名な報告書「北越秘説」は「竹島一件二而異国交易抜荷之儀厳敷被仰出」と記載しているが、この時の天保八年三月の触では「渡海致す間敷候、勿論国々の廻船等海上におゐて異国船二不出会様乗筋等心掛可申旨」と命じており、やはりこの触は単なる渡海禁制ではなく、異国船との出会い交易も禁じている<sup>(13)</sup>。なお、当時の老中を出していた長岡藩牧野家が周知のように新潟での薩摩藩による抜荷取引を容認しており、またこの時期に浜田藩主も老中であり<sup>(14)</sup>、しかも指摘されているように将軍の外戚島津家から嫁をもらっていたという同藩の幕府内での立場が、財政苦から島津家・牧野家同様に抜荷にかかわらせたとしても決しておかしくないのである。

浜田に薩摩船も入津し抜荷品を運び込めるが、本格的な取引をひそかに行うとすれば鬱領島の利用が好ましく、また同島であれば取引も朝鮮漁民など朝鮮関係者や、後にみる欧米の捕鯨船も取引相手として問題となるが、抜荷ではなく渡海一件で幕府により処置されてしまったので史料がないために取引地が浜田なのか鬱領島なのかわからない。この鬱領島

の場合は同島に恒常的取引施設の建設をしなくとも、空島のために島やその周辺海域を利用して出合い的な抜荷取引を行うことが可能となる場であった。しかし、鬱領島で抜荷取引が行われていたとしても、これに銭屋五兵衛がかかわっていたか否かは直接の史料により明確にされなければならない点である。

このような鬱領島について、遠藤雅子氏が同島周辺でのタスマニア捕鯨船による取引を考えている。氏はタスマニアの公文書館に所蔵されているタスマニアの捕鯨船であるノース・アメリカ号の1850年（嘉永3年）の航海日記にて、同船が3週間近くも鬱領島近辺に滞船していたことを指摘している<sup>(15)</sup>。また、同船がその後に金沢周辺の近海を一ヶ月以上もの間を行きつ戻りつしていたことも指摘している。捕鯨に適当な海域でもないのに、鬱領島近辺に滞在したり、また金沢沖を長期間行き来していたのは確かに遠藤氏が興味を持たれるような日本の廻船との接触も考慮しなければならないが、洋上での日本廻船との取引については、後に改めて取りあげたい。

以上のようにタスマニアの捕鯨船の航海日記に銭屋五兵衛の廻船と取引した話など記載されているわけはなく、また別の日本の史料から銭屋五兵衛の廻船が鬱領島で取引したことを示す史料は発見されていない。いずれにしても朝鮮側の史料より朝鮮関係者と日本人との取引を示す史料を探しださねばならないことになる。

#### イ、タスマニア

遠藤雅子氏がタスマニアと銭屋五兵衛との関係を結びつけようとするのは、五兵衛が海外に土地を持っていたことを示す有名な石碑の存在したとされる所がこのタスマニアであったためである。氏はタスマニアの古文書館や州立図書館の資料により次のことを示している<sup>(16)</sup>。当時の同島で発行されていた新聞にはこの石碑を見たとする芸人が実際に同地を訪れていた記載のあること、当時タスマニアの農園主が農産物不況により土地を島外の者へ売却していた事実のあること、以上から銭屋五兵衛関係者がタスマニアを訪れていたとする。そして、そのタスマニア行きは和船ではなく、当時のタスマニアの捕鯨船の航海日記に加賀沖に長期滞在していた記録のあることなどから、五兵衛関係者が日本近海に来ていた捕鯨船を利用してタスマニアへ出かけていたと

される。興味深い見解とはいうものの、以上の点を裏付けるために五兵衛関係者がタスマニアに渡航していた直接の史料がやはり必要となる。

なお、銭屋五兵衛の廻船がアメリカへ出かけていたとする説もあるが、これについては鏑木氏も特に支持しているわけではない<sup>(17)</sup>。五兵衛とは別であるが、網野善彦氏は17世紀初頭のペルーに日本人が存在したことや支倉常長の航海から日本人のアメリカ大陸への航海を指摘している<sup>(18)</sup>。しかし、漂流その他によりアメリカ大陸へまれにたどり着くことがあったとしても、日本との行き来までは考えられないのではないかと。現在のところ明治20年代に伊予の宇和海で発達した、外洋での耐航性を持つ高性能な和船の打瀬船を使って吉田亀三郎という漁師がアメリカへ密航したのが最初の我が国の太平洋横断の自主航海とされている<sup>(19)</sup>。この宇和海で発達した打瀬船のような船でなければとても往復の太平洋横断など無理なので、近世の廻船による太平洋往来は考えがたい。

## 2. 北方でのロシアとの取引

ロシアとの取引が行われていたことについて鏑木氏は加賀藩家老の「御家老方等手留」<sup>(20)</sup>に記載された、次の記事をもとに認めている。

右ハ魯西亜船去冬渡来ノ節、加州ヨリ米二万石毎歳商候旨申聞候義相見候由、前田久盛より之沙汰書ニ相見候。帳面相回且銭屋五兵衛ノ一件ニ付喜太郎永牢ニ而存命之義公辺ヨリ若御呼立等ニ相成候而ハ甚御面倒之筋可有之、右ニ付重而何とカ御刑法被仰付候ハ、可然哉之内状到来、返書ニ先達而落着御厳刑之上今更死刑など申義無謂、却而公辺江聞候而モ宜かる間敷、御呼立ニ相成候時ハ、此方様ニ而之御刑法ハ瀉一件右之外ノ義相知不申事、御邪魔ハ有之候共右様之義有之時、明白ニ相成候へハ尚更可宜等との返書下物相廻候也

鏑木氏は「露西亜船去冬渡来ノ節、加州ヨリ米二万石毎歳商候旨申聞候義相見候由、前田久盛ヨリ沙汰書ニ相見候」の記事に注目する<sup>(21)</sup>。このロシア船とは嘉永6年(1853)のプチャーチンの船のことで、加賀より2万石の米が毎年ロシア側に売り渡されていたことが同使節から幕府側に伝えられたその事実を、幕府の坊主組頭前田より情報をえたというものである。

若林喜三郎氏は鏑木氏の指摘する密貿易説につい

て、他の史資料については否定的であったが、これは加賀藩の記録に記載されたものなので受け入れている。しかし、当然ながら2万石もの大量の米を五兵衛の船だけで売却することなどは考えられないので、この点を限定的にみて、「北海」こと北方地域での抜荷の存在を考えている<sup>(22)</sup>。一方、この史料から若林氏の指摘する通り2万石を輸送するには多すぎることを問題にし、また家老中川も五兵衛の容疑はあくまでも投毒だけで、「密貿易など取り上げるに足りぬと一蹴したが、これが真実である」として、五兵衛の密貿易を否定したとする見解も出されている<sup>(23)</sup>。2万石の点はあらためて後に取り上げるが、存命している五兵衛の伴喜太郎の処置についての「内状」があったこともこの史料には記載されており、これに対して、すでに刑は決まっておき、今になり彼を死刑にしてはよろしくなく、幕府から呼び立てがあっても、加賀藩の「御刑法ハ瀉一件右之外ノ義相知不申事」も記載している。しかし、だからといって密貿易など取り上げるに足らぬとは右史料には記載されていないし、またこれが真実というにはそれを裏付ける根拠は何もないので、この史料から銭屋五兵衛の密貿易否定を導きだせるわけではない。この史料の後半は瀉に毒を流した一件で処置したことを、ロシア船の話に動揺して密貿易で改めて処分すれば藩がそれに関与したと捉えられてしまうのでよくないということの家老中川が述べたものである。また、明白になっても良いと記しているのは、瀉一件の真実か、あるいは銭屋五兵衛がロシアへ米を売却していたことであっても、既に藩により東北なども含む五兵衛家関係の関係史料の調査も終えており、構わないということであろう。いずれにしてもこの史料から五兵衛のロシア側への米売却が否定されることはない。

かくして、ロシア船との交易で若林氏も疑問を持った2万石という大量の米の売却がやはり問題となる。史料には加賀から売却と書かれて、銭屋五兵衛とは記載されていないので、当初から銭屋五兵衛一人が扱ったとはされていない。ただし、その後の史料の内容から銭屋五兵衛がその米の重要な扱い人と考えられていたことは理解できる。とはいえ2万石もの米が加賀藩の海商により売りさばかれたかという点、実はこの米2万石という量は加賀藩にとり、例えば弘化3年(1846)の年貢米のうち大坂廻米以外の廻米、売り払い米の重要な部分を占める、木

谷藤右衛門・三国与兵衛ら24人へ売却した端浦売米1万9100石に相当するという大量なものであった<sup>(24)</sup>。

このように端浦廻米に相当する分量の米が銭屋五兵衛らによりロシアへ売却されることなど考えにくい。しかし、ロシア側は北方に居住した商人などロシア住民も食料を非常に必要としていた。食料確保のためにも日本との国交がロシアには必要であり、そのためにもロシアは周知のように千島方面を主とした漂民を日本へ度々返還しようとしてきたのである。米など食料の見返りに日本側が必要とするのは海産物であるが、大量の米に見合う海産物をロシア側は提供できない。ロシア商人の主取り扱い品となるのはラッコなどの毛皮で<sup>(25)</sup>、彼等は十分な漁業技術や漁網などを持たないためである。もっとも昆布採取であれば特別な技術や道具はいらない。慶応年間にロシアの沿海地方へ漂着した越中の漂民が同地で昆布漁を現地住民が行っていることを記録している<sup>(26)</sup>。しかし、これもエトロフ島などと異なり、ウルップ以北の千島では昆布がどれほど採れるかという問題がある。

銭屋五兵衛による大規模な抜荷取引をロシアとの間で考えることはできないが、北方ではロシア商人らが米などの食料を必要としていたのは間違いない。そして、こうした抜荷取引が行われるとしたならば、北方の島やその周辺が妥当となる。この点についてすでに示村龍氏が千島列島地域の日ロ関係を踏まえて、ウルップ島が文化4年(1807)以降には幕府の統制が及ばない地域として銭屋五兵衛の密貿易地であったことを推定している<sup>(27)</sup>。銭屋五兵衛の密貿易地はともかく、密貿易で気になることをシーボルトがその著書『日本』<sup>(28)</sup>で次のように記している。

徳撫は日本の千島の端の島(ロシアの地図によれば十八島)で、ここで日本の住民とロシアの住民との間で交易が行われている。われわれが信頼できる筋から知ったところでは、日本政府の側がこれを黙認しているので毎年のように増加している。また、ロシア政府の側がこれに干渉することがないのは、恐らくその間は支障なく行われているからであろう。

シーボルトが信頼できる筋から聞いたとしているのは、蝦夷地測量図を借り受けた北方事情に詳しい最上徳内など幕府関係者を指しているのであろう。

彼が来日したのは文政6年(1823)である。幕府がエトロフ島までを支配領域として、ロシアはシモシリ島までの領有とし、その間のウルップ島などは家屋も建てさせぬ空島として、この千島列島間での交易を途絶させる方針を打ち出したのがゴローニン事件後の文化11年(1814)とされている。しかし、この方針はロシアへ伝達されずに終わってしまったことが指摘されている<sup>(29)</sup>。シーボルトがえた情報は、ウルップ島でロシア住民と日本住民の交易が盛んに行われていたとするものであったが、これは文政期のこととなる。アイヌについてシーボルトは日本人と区別して記載しているので、日本人によるロシア人との取引が内々にウルップ島で行われていたことになる。ウルップでの取引はロシア商人からすれば食料確保の貴重な機会であり、日本人からすれば昆布など海産物入手の機会にもなるのではなかろうか。

なお、銭屋五兵衛の廻船がウルップへ出かけていたことを示す史料はないが、米をロシア側へ売却する場として考慮されるのは、北方でも同地かその周辺の海域が有力候補にあげられることになるろう。

最後に、北方での山丹交易についてふれておく。銭屋五兵衛の外孫の清水九兵衛は手船で樺太へ航海して家具類を交易したと述べており、これにより鐮木氏は山丹交易に五兵衛もかかわっていたとする<sup>(30)</sup>。これに対して若林氏は「清水は頼りない話し手」としてこの件を否定的に捉えている。ただし、銭屋五兵衛の廻船が河北瀉一件の詮議により樺太へ航海していたことが確認されているが、現地住民の間での山丹交易にどのように関与できるかは不明としている<sup>(31)</sup>。当然に幕府が認めていた樺太の自主での山丹交易に銭屋五兵衛らは関与できないが、樺太の別の場所でのアイヌ人との接触の中で物々交換が可能なのは、次項で取りあげる欧米の捕鯨船と日本の廻船との関係をみれば了解できる。前記のウルップ島のようなことが樺太でもみられてもおかしくはないと思うものの、残念ながらここではウルップ島のような関係史料を見いだしていない。

### 3. 外国船との洋上取引

鐮木氏は聞き取りとして、元改作奉行の安井顕比による五兵衛についての次の話を紹介する。すなわち、彼が改作奉行の時に五兵衛の廻船が航海中に遭遇した異国船より投げ込まれたキリストの十字架像を提出されたという。この話は別の改作奉行石黒堅

三郎も肯定しているという<sup>(32)</sup>。

周知のように19世紀に欧米の捕鯨船が日本近海に進出するようになり、このような中で水戸藩領への英国捕鯨船員上陸や薩摩宝島上陸一件があり、文政8年(1825)に異国船打ち払い令が出されたりした<sup>(33)</sup>。日本近海で操業するようになった外国の捕鯨船には当然に水・食料が必要であり、これをできれば日本で求めたいもののこの点は容易でなく、捕鯨船は代わりに公海上で出会う日本船と取引することになったのであり、銭屋五兵衛の廻船が欧米船と出会うことがあっても不思議なことではなかった。当然ながら出会って十字架を投げ込まれたということと、物々交換的な取引をしたということはイコールではなく、そのような記録も残されているわけではない。

しかし、捕鯨船と日本船との取引が行われていたことが事実であることは、遠藤雅子氏がタスマニアの捕鯨船の航海日記からも明らかにしている。すなわち、レデイ・ロウエナ号の天保2年(1831)の航海日記に記載されている日本の船との頻繁な接触と物々交換を示すとともに、その中に日本船より小型コンパスや港の展望図その他地図などを入手していたり、仙台の廻船から米10俵に加えてなんと三角法・幾何学の本や博物学の本を得ていたことも示す<sup>(34)</sup>。一般の廻船の船頭が高度な算学の書籍や博物学の本を持参して航海することなど考えがたい。これらは当初から外国の捕鯨船との出会いの際の交換品として廻船の船頭が所持していたものと考えてもよいものである。天保期には航海する日本の廻船は外国船に頻繁に出会うようになるので、物々交換による取引のために彼等が喜びそうな書籍や地図その他物品を積んでいる廻船も少なくなかったことがわかる。

日本海を航海する北国の廻船、すなわち北前船は、天保13年(1842)10月の幕府の法令によると、朝鮮近海まで航海するようになっていたことがよく知られているが<sup>(35)</sup>、実際に遠藤雅子氏が紹介する嘉永2年のノース・アメリカ号は日本海にも入ってきており、しかも長期間留まっていた<sup>(36)</sup>。当時日本海にも入ってきていたこれらの外国の捕鯨船やまたロシア船と日本の廻船は当然に洋上で出会うことになる。この時に物資交換が行われることがあっても不思議ではない。ただし、問題の五兵衛の廻船となると、残念ながらこの点についての史料は残されていない。

## 二、国内での抜荷取引

銭屋五兵衛が海商として成長していった時期の日本海では薩摩藩が琉球を介して入手していた抜荷品の取引拡大がみられた時代であった。それゆえに五兵衛とこの薩摩藩主導の抜荷との関係を積極的に問題としなければならない。

薩摩藩が主導した抜荷品流通について鏑木氏は直接問題にすることはなかったが、それでも海外密貿易の問題で、薩摩藩領の薩南諸島にて銭屋五兵衛の廻船が英国人と取引したとする著名な川島元次郎説を取り上げている<sup>(37)</sup>。これは旧薩摩藩士川上久良が大正年間に口永良部島で実施した調査を根拠にしたものである<sup>(38)</sup>。

それによると藩は帆船にて日本海経由で北海道に航海させ、昆布その他の海産物を入手し、さらに鹿児島より米穀・醤油などを運び、口永良部島にて英国人と取引していたという。すなわち、この島には英国人が住む洋館があったという。英国人は薩摩藩との間で密貿易をしており、ここに五兵衛の廻船も寄港して抜荷取引を行っていたとする。口永良部島のこの密貿易所は白糖方といい、一時は白砂糖を製造していたことも古老より聞き取っている。これらの根拠は文書によるものではなく、現地での聞き取り調査によるもので、その中には英国人の妾となっていた女性が調査時点で島に居住しているとの指摘もあるので、英国人が幕末のこの島で活動をしていたこと自体は否定しにくい。そして、この調査によると西洋館は銭屋五兵衛の密貿易が発覚したので急遽取り壊されたとする。川島氏は以上の調査を踏まえて、五兵衛の廻船が時々坊津に入津していたことや、五兵衛外孫の清水九兵衛の談話に密貿易所が暖国の海島にあり、欧州産の毛氈などを取引品にし、また同島で生産していた白砂糖を五兵衛が多量所持していたことに注目する。そして、以上により銭屋五兵衛が口永良部島で抜荷取引を行っていたのである。

鏑木氏はこの川島氏の説を承認したが<sup>(39)</sup>、若林氏はこれらの説を否定した<sup>(40)</sup>。まず、第1にこの島で英国人と薩摩藩との間での取引や坊津に銭屋五兵衛の廻船が出入りしたことは論拠として不十分であること、2に清水の談話は当てにならないこと、3に薩摩藩の白砂糖製造は慶応2年(1866)であること、4に西洋館取り壊しが五兵衛死去から12

年も後のこととなっていたこと、以上より銭屋五兵衛のこの島での抜荷取引の存在を認めなかった。

英国と薩摩の関係が嘉永6年(1853)の五兵衛の摘発より前に見られたとするのは、ペリー来航が嘉永6年で、日米和親条約締結が翌年3月、その後すぐの10月に日英和親条約締結をみたことから、あまり現実的ではない。また、五兵衛の廻船の口永良部島での取引も島民に直接伝承されていたわけではなく、さらに基本的な問題としてこれを裏付ける史料がないことがある。

しかし、銭屋五兵衛の廻船が薩摩まで来港していたか否かは重要な点である。これについて鐫木氏は薩摩芋を五兵衛が薩摩より移入した話を紹介している<sup>(41)</sup>。ただし、これは伝承であり、明治以降に作られた話の可能性がある。

銭屋五兵衛の廻船が薩摩へ出かけていたか否かについては、気になる史料を鐫木氏は紹介している。これは南部津軽の支店の活動状況を知る上で参考になるとして全文が紹介されたもので、加納屋吉兵衛から五兵衛本店に出された鐫木氏が文政8年(1825)とする酉10月23日付けの書翰である<sup>(42)</sup>。この中に加納丸の廻船活動の報告があり、これに昆布買い付けに加えてメ粕購入に関してふれ、その中で「私義は天草にて五十両相渡し置候分メ粕冬買向置」と記載している。天草は薩摩への航路にあり、薩摩手前の所ともいえるので、五兵衛の廻船の薩摩行きを知る上で重要な場所である。

この書翰は、箱館奉行村垣氏が幕府購入のロシア船に乗船する話を記載しているのでよく知られた史料である。しかし、文政には幕府の箱館奉行は存在しないので、村垣が同奉行に在任していた文久元年(1861)の酉年のものとみられる<sup>(43)</sup>。結局、この書翰が伝えている天草との関係は五兵衛が亡くなった後の史料のために、残念ながら抜荷取引のために五兵衛の廻船が薩摩へ航海していた関係史料として取り上げることはできない。

銭屋五兵衛が薩摩藩への移出品として重要な昆布を扱っていたことを知る史料には、天保6年(1835)の五兵衛廻船難船の一件もある。これは弘前藩の日記の同年10月14日記事に、同家沖船頭と右衛門の船15人乗りが夏に「松前箱館江相廻、中物昆布七百石目積入出帆之所、難船ニ相成」と記載されているものである<sup>(44)</sup>。この昆布について詳しいことはわからないが、銭屋五兵衛が天保期に松前藩領の

箱館で昆布を仕入れた事実はわかる。また、松前の宮島屋布左衛門が蝦夷地のある場所にて買い置いていたホロイツミ昆布500石を天保9年5月に五兵衛の船頭八十吉が大津屋茂吉から譲り受けて代金支払いを行った約定の記録も残る<sup>(45)</sup>。

銭屋五兵衛についての基本史料の「年々留」には次のような記載がある<sup>(46)</sup>。

天保四年○八月朔日ニ、エソ地シャマンにと申着石場所ニおみて、昆布場所買付宝銭丸新造千式百石積舟破船いたし候、中荷昆布八百石目斗積懸申所、寅卯風はけしく吹、碇綱被払砂浜へ吹寄、船玉格別痛不申候へ共、砂堀埋レ、無抛其儘いたし置、道具大躰取上申候、柱ハ焼テ鉄子取申候、搦身木迄いたし、場所預ケ置申候、道具半分程便舟にて夫々取寄候得とも、半分通場所有之追々取寄度と心懸ケ居申候、尤壺番登りも大豆積登り損分相成、其上松前城下ニ下り物産・数子等買入蔵入致置候所、七月廿日火事にて焼捨、尤六拾両斗損失相成申候、船玉十分相調候船故残念存候、金子ハ雑用等入テ百五拾両斗損金相成候得共、船玉ハ千両斗上り申候船也、其節船頭与助水子拾貳人とも無難上り申候、執上り候道具ハ凡式百両斗也

これによると、天保4年に五兵衛の千石船宝銭丸(1200石)が蝦夷地のシャマンニに航海して昆布を購入したこと、ただし100石ほど積んだところで激風にて砂浜へ打ち上げられる被害を被ったことがわかる。五兵衛の廻船が昆布を買い付けに蝦夷地の昆布場所に入り、昆布買い付けを行っていたことを知りうる。

以上のように、薩摩藩の抜荷が盛んに行われていた時期の天保年間に五兵衛も蝦夷地で昆布買い付けを行っていたことは確認できる。しかし、その昆布を薩摩へ運んでいたことを示す史料は残念ながら確認できていない<sup>(47)</sup>。

## おわりに

はしがきで記したように、銭屋五兵衛家の人々が捕縛された際に不都合な資料はみな処置したと考えられるので、銭屋五兵衛の抜荷取引を史料で実証するのは極めて困難である。しかし、抜荷取引を直接示す史料がないため抜荷取引がなかったと直ちに結論を出してしまい、この点での検討を放棄するの

よくない。19世紀には食料・水を必要とする欧米の捕鯨船が日本近海に多数出没するようになり、定期ではないがこれとの出会いの際の取引が可能となり、またロシアが南下して同商人やロシア船と接触しやすい状況が生まれていた。そして、なによりも薩摩藩が主導した抜荷品の流通が展開するようになった。こうした状況下での、海商の活動を考えるうえでも銭屋五兵衛の活動で行われたとされる密貿易、抜荷取引のあり方を改めて検証することは重要なために、本稿ではそれらを具体的に再検討してみた。

以上の結果、もし銭屋五兵衛が外国人との取引をしていたとするならば、日本海上での外国捕鯨船との取引や北方での取引をまず考えなければならないことがわかった。しかし、前者での取引があったとしてもわずかな額で、後者もその取引量は米2万石などというのは明らかな間違いで、代わりに入手する昆布・海産物などの商品を考えて限定されてこよう。このほか鬱領島とその周辺での取引も想定されるものの、銭屋五兵衛に関するこの取引についての直接の関連史料を依然として見いだすことができていない。

銭屋五兵衛でより問題にすべきは国内での抜荷取引である。そして、この中心は薩摩藩が主導した抜荷品の売買となる。これに関して銭屋五兵衛の廻船が薩摩藩領の島へ航海して取引していたのではないかとされていても、残念ながらこれも直接の史料は見い出されていない。五兵衛の廻船が薩摩藩が求めていた昆布を蝦夷地で買い求めていたことは確認できるものの、この昆布を積んで東廻りで薩摩へ運ぼうとしたかどうかは不明である。しかし、樺太から持船宝得丸が鮭を積んで江戸へ航海したことを、河北潟一件で捕縛されて詮議を受けた際に手代市兵衛が申し述べていることは既に紹介されている<sup>(48)</sup>。このことは少なくとも銭屋五兵衛の廻船が東廻りの航海をしていたことを教えてくれる。そして、天保12年(1841)に大野の丸屋の廻船が東廻りの航海をして売買活動する中で漂流した著名な一件を考慮すると<sup>(49)</sup>、天保以降の段階には加賀の北前船が太平洋岸にも進出して買い積み船の活動をしていたことを教えてくれる。さらに、向粟崎の有力海商島崎屋の廻船が嘉永3年(1850)に東廻り航海の際に漂流して青ヶ島に漂着した一件やこの島には当時越中六渡寺の長寿丸の乗組員も漂着していたことがす

で知られており<sup>(50)</sup>、この時期には加越能の廻船が日本海沿岸だけではなく、太平洋岸へも廻って買い積み活動などの廻船活動を展開させていたことを示してくれる。もっとも、いずれにしても銭屋五兵衛の薩摩藩への航海や抜荷取引を具体的に裏付ける史料をえられなかったのは事実である。そして、今後に関係史料を探し求める課題を残すことになった。

さて、文政期に廻船活動をはじめた銭屋五兵衛が天保後期に加賀藩の中でも最有力の海商に上り詰めたのは、米の大坂での投機<sup>(51)</sup>や天保飢饉時などでの米移出版売などで成功したということも推測できるが<sup>(52)</sup>、このときの活動の全容はわからない<sup>(53)</sup>。基本的には通常の廻船活動や商業行為に秀でたものがあり、銭屋五兵衛が有能な海商であったこと、そして特に新興海商型御用商人と定義されるような<sup>(54)</sup>藩との結びつきを強めたことにも由来するのであろう。とはいえ彼の廻船による抜荷取引がなかったということもできない。この抜荷の中心は新潟の廻船問屋ら海商、そして薩摩・新潟間の抜荷輸送路にある寄港湊の一部の廻船問屋ら海商も深く関与したのは間違いない。新潟に入港する加賀藩や富山藩関係、つまり加賀・能登・越中の廻船を扱う廻船問屋であった当銀屋は、周知のようにこの抜荷取引の中心的廻船問屋であり、加賀藩最有力の海商木屋藤右衛門家の再建に手を貸し、また日頃取引を行っていた<sup>(55)</sup>。先稿で示したように、当銀屋の文書には幕府の抜荷摘発が行われたために、その取引が行われていた時期の証文が残されていないので<sup>(56)</sup>、具体的にどの海商が抜荷取引を行ったか、もちろん銭屋五兵衛がこれにかかわったかも不明である。

しかし、銭屋五兵衛が海商として成長していった時期の文政期は2つの点で注目される時期である。まず、第一にすでに明らかにされているように薩摩藩が抜荷を拡大させていった時期であること、第2には鍋木氏が明らかにしているように銭屋五兵衛が輪島の海商久保屋と共同で会津藩関係の事業を行った時期であったことである。鍋木氏はこの事業以前にも早くから種々の事業を共同で行ったことを考えて良いとしているが<sup>(57)</sup>、この輪島は薩摩藩の抜荷輸送廻船が立ち寄り、一部の抜荷品を売却して取引が行われていた所であった<sup>(58)</sup>。この有力な海商であったこの久保屋は、中期に薩摩藩に御用金の用立てをして大変に薩摩藩と密接な関係にあった廻船



問屋でもあった。また薬種や抜荷品も含まれる朱を取り扱う薬種商・漆器商でもあったことは先に指摘している<sup>(59)</sup>。銭屋五兵衛が海商として成長していった時期こそ、薩摩藩との強い結びつきを持った輪島の久保屋と事業提携をして活動していた時期であること、それゆえに久保屋の抜荷品取引に銭屋五兵衛も関係していたことが多いに考慮されるが、当然ながらこの点は史料で明確にしなければならない点であるものの、残念ながら久保屋の史料は分散、散逸して、銭屋五兵衛関係の史料はよく知られている争論一件の史料以外はほとんど残されていない<sup>(60)</sup>。

## 註

- (1) 戦前の重要な研究に鍋木勢岐『銭屋五兵衛』(池善書店・1927年)と石川県編刊『石川県史』2巻(1928年、2編5章3節「銭屋五兵衛」)・示村龍(『日本海を中心として』示村龍遺稿刊行会・1937年の「銭屋五兵衛の密貿易」)・松風嘉定『銭屋五兵衛真伝』(1930年・藤岡幸二刊)がある。鍋木氏はその後にさらに研究を進めた成果を補充して戦後に『銭屋五兵衛の研究』(銭五顕彰会・1972年再版、初版1954年)にまとめ直しているが、本書は現在も五兵衛研究の最重要文献である。同書にならぶ戦後の代表的研究に若林喜三郎『新版銭屋五兵衛』(北国出版社・1982年)がある。この著作は藩政史の動向の中に銭屋五兵衛を位置づけたものである。なお、氏は五兵衛の重要史料『年々留一銭屋五兵衛日記』(法政大学出版局・1984年)を翻刻した。
- (2) 遠藤雅子『幻の石碑―鎖国下の日豪関係』(サイマル出版会・1993年)。この石碑について以前は、五兵衛廻船の漂流民が英国船に助けられ、タスマニアにてこの碑を残したという解釈が行われた(前註1示村龍「銭屋五兵衛の密貿易」)。戦後の研究では五兵衛の密貿易説が支持されていたが、日置謙「銭屋五兵衛」(『楽晩荘随筆』北国新聞社・1952年)・木越隆三「銭屋五兵衛と加賀の海商たち」<地方史研究協議会編『地方史事典』弘文堂・1997年>の密貿易否定説も一部にみられる。ともに藩が調査して密貿易を否定したことを重視するが、五兵衛の密貿易は藩にとっても不都合な点もあるので、これを

重視してよいか問題となる。重要なのは密貿易を裏付ける史料として鍋木・若林氏等により理解されている藩の家老の記録「御家老方等手留」(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵加越能文庫)を否定できるかという点であるが、これは本文にて後に検討する。なお、北国新聞平成2年12月31日の朝刊21面上段には「『銭五』の交易南豪州まで?」とする見出しの大きな記事が掲載されている。同記事によるとシドニー在住でオーストラリア大使館元勤務のノンフィクション作家ウオーレン・リード氏がタスマニア島の港湾記録で五兵衛の土地の碑を見たとする軽業師の寄港を確認したとし、五兵衛の同島の土地所有についての調査のために金沢に来訪したという。残念ながら氏の調査がその後、どうなったのかは不明である。

- (3) この記念シンポジウムの準備のために実施された地元住民向けの講演会では密貿易・抜荷関係については筆者の「銭五と加賀海商の抜荷取引」や木越隆三「銭屋五兵衛と北前船の時代」が、他に五兵衛と海運や藩財政について平野俊幸「『北前船』の歴史と銭五」、長山直治「加賀藩財政と海商達」の講演が行われた。この時の木越氏の講演では「真龍院と密貿易」も含む、後に刊行される五兵衛の伝記本の概略が取り上げられている。実際のシンポジウムでは青木美智男氏が「銭屋五兵衛と北前船の時代」の講演を行い、木越氏の司会により、平野・長山両氏による前述のテーマによる報告と、抜荷に関しては前論題の深井に加え、遠藤雅子「タスマニアと銭五」の報告が行われた。このシンポジウムは残念ながら書物として刊行されなかったが、その報告のレジメは銭五顕彰会編刊『北前船の歴史文化と銭屋五兵衛』(2001年)にまとめられている。本論文はこの時の報告をもとにしている。なお、木越氏は事前報告で取りあげた著書の伝記を、シンポジウムより若干遅れて『銭屋五兵衛と北前船の時代』(北国新聞社・2001年)として刊行している。
- (4) 前註3木越『銭屋五兵衛と北前船の時代』は、密貿易に関しては前記学習会報告での「真龍院密貿易」の項が「真龍院と伏見宮家」に改められた。本書では前掲「銭屋五兵衛と加賀の海商たち」のように密貿易を否定している。同書は

研究史で五兵衛の密貿易が海外雄飛を問題とする明治時代に取りあげられるようになったことを大変重視し、五兵衛の密貿易説を明治以降に展開した説として終章の3「海外密貿易説」でそれらの説を批判する中で簡単に処置している。著者は同書執筆のモチーフについて、牧野隆信氏等の北前船研究で「新しい銭五像」を描く条件がそろったことを述べているように、氏の描こうとした新しい海商像とは専ら牧野氏等の解明しようとした蝦夷地・上方を結ぶ日本海沿岸の海運史という視点の「北前船の時代」の中にある。つまり、近年の日本史研究で一般化している環日本海地域史、東アジア史の視野の下で、また近世史における対外関係の鎖国制的把握の見直しという観点の中で加賀藩地域の海商の活動も可能な限り理解していくという視点を取っていない。このため積極的に時代に向き合って、唐物など他国よりの移入品の特権的な流通経済の枠組を破っていく、新たな海運の担い手の海商らの動きには残念ながら目が向かないことになったといえる。

- (5) 伏木港史編さん委員会『伏木港史』(伏木港海運振興会・1973年、4章7節)にその詳細が詳しく紹介されている。
- (6) 滝屋文書、嘉永7年正月書状(『金沢市史』資料編8、2編2章109号文書)
- (7) (8) 前註1 鐮木『銭屋五兵衛の研究』。廻船については前註1 若林喜三郎編『年々留』も参照。
- (9) 前註1 鐮木『銭屋五兵衛の研究』7章1と4
- (10) (17) 上同書・7章1。関係史料として「銭屋五兵衛一件」(金沢市立玉川図書館近世史料館蔵加越能文庫)も参照。
- (11) 浜田市教育委員会編『八右衛門とその時代』(森須和男執筆) 浜田市教育委員会・2002年。従来、会津屋八右衛門とされていたが、今津屋が正しいという。なお、この一件については森須「竹嶋一件考」(『亀山』14～19と23, 1987～1992年)他や落合功「『竹島渡海一件』について」(『中央史学』24, 2001年)などがある。
- (12) 東大附属図書館蔵「竹島渡海一件記全」など上記『八右衛門とその時代』収録翻刻史料参照。
- (13) 新潟市郷土資料館編刊『川村修就文書』V・一九八二年。また、幕府触は前註11浜田市教育委員会編『八右衛門とその時代』にも収録。なお、間宮林蔵のこの一件摘発については洞富雄『間宮林蔵』(吉川弘文館・新版1896年)の「幕府隠密」項、他。
- (14) 牧野忠精は享和元年より文化13年、文政11年より天保2年に、浜田藩主松平康任も文政9年より天保6年に同じく老中を務めていた(児玉幸多編『日本史総覧』IV巻<新人物往来社・1984年>「江戸幕府諸職表」)。
- (15) 前註2 遠藤雅子『幻の石碑』8章
- (16) 右同・4章・7章～9章
- (18) 網野「海の時代」(『海と列島の中世』日本エディタースクール出版部・1992年)
- (19) 小島敦夫『密航漁夫』集英社・2001年、1・2章
- (20) 加越能文庫蔵(金沢市立玉川図書館近世史料館)
- (21) 前註1 鐮木『銭屋五兵衛の研究』7章3
- (22) 前註1 若林『新版銭屋五兵衛』4章3節
- (23) 前掲註3 木越『銭屋五兵衛と北前船の時代』終章3
- (24) 弘化3年「御勝手方御用心覚」(前出加越能文庫蔵)
- (25) 大塚和義「北太平洋の先住民交易」(国立民族博物館編刊『ラッコとガラス玉』(2001年)他。天明期にウルップ島まで来ていたロシア商人とアイヌの交易では、絹・木綿・砂糖・薬種なども扱われていたことが紹介されている(川上淳「一八世紀～一九世紀初頭の千島アイヌと千島交易ルート」<北海道・東北史研究会『メシナの世界』北海道出版企画センター・1996年>)。
- (26) 拙著「近世越中の小廻船、平寿丸のロシア漂流について」『富山史壇』135・136合併号・2001年
- (27) 前註1 示村龍「銭屋五兵衛の密貿易」
- (28) シーボルト『日本』4巻(雄松堂・1978年)5章
- (29) 前註25川上淳「一八世紀～一九世紀初頭の千島アイヌと千島交易ルート」
- (30) 前註1 鐮木『銭屋五兵衛の研究』7章2。前註11「銭屋五兵衛一件」も参照。
- (31) 前掲註1 若林『新版銭屋五兵衛』4章3節。なお、前註1 示村龍「銭屋五兵衛の密貿易」は清水が頼りない話者といっても、彼の話す事柄の中に幼い頃に聞いた真実が含まれていること

を無視出来ないとして、この樺太での交易の話  
を容認している。

- (32) 前註1 鐮木『銭屋五兵衛の研究』7章8。前  
註11「銭屋五兵衛一件」も参照。
- (33) 井上光貞他編『日本歴史大系』3巻(山川出  
版社・1988年)2編5章
- (34) 前註2 遠藤雅子『幻の石碑』7章
- (35) 『幕末御触書集成』6巻(岩波書店・1993年)  
5123号
- (36) 前註2 遠藤雅子『幻の石碑』8章
- (37) (39) 前註1 鐮木『銭屋五兵衛の研究』7章  
6
- (38) 川島「銭五の密貿易船の行方を尋ねて」(満  
川亀太郎『南国史話』平凡社・1926年)
- (40) 前註1 若林喜三郎『新版銭屋五兵衛』4章3
- (41) 前註1 鐮木『銭屋五兵衛の研究』15章1
- (42) 上同・5章11。この船でロシア人が津軽にも  
上陸していたこと、また青森とその周辺の深沢  
平野5万石収公の噂が出ていたこともこの書簡  
からわかるが、銭屋五兵衛が亡くなった後の幕  
末の、再興銭屋家の経営資料としても貴重であ  
る。
- (43) 児玉幸多編『日本史総覧』IV巻<新人物往来  
社・1984年>「江戸幕府諸職表」
- (44) 弘前市立図書館蔵「御国日記」(『金沢市史』  
資料編8,2編2章30号文書)
- (45) 田中正右衛門文書(上同資料編8,上同38号  
文書)
- (46) 前註1『年々留』83頁
- (47) 鐮木氏らが紹介されている漂流記の弘化3年  
「東洋漂流記」(前註1 鐮木『銭屋五兵衛の研究』・  
示村龍『日本海を中心として』・松風嘉定『銭  
屋五兵衛真伝』・『石川県史』2巻)は、銭屋五  
兵衛の持ち船が昆布を積んで東廻り航海をして  
漂流した一件をまとめたものである。東廻りで  
昆布輸送により漂流した著名な船に富山売薬薩  
摩組能登屋の廻船長者丸があるが、これと同様  
な漂流が弘化年間に銭屋五兵衛の廻船でもあっ  
たことを示す貴重な史料ということになる。こ  
れは船頭から著者が直接話を聞いたものである  
ものの、漂流記としてまとめ直すための手が  
入っており、未完成であるが表題からみて場合  
によっては明治に入ってまとめられた問題があ  
る。同史料については金沢市史編纂の際に調査

- された銭五遺品館文書の所在目録を編纂室で見  
せていただいたところ、酉午、河合法筆の(弘  
化2年銭屋慎八の廻船漂流船仙台領帰帆の件に  
つき聞書、袋綴6丁)が記載されていたので、  
他の文書とともにシンポジウムの準備報告の  
際に銭屋五兵衛記念館館長に撮影をお願いし  
たが、残念ながらこれは行方不明で見い出されな  
かったとのことであった。この聞き書はみられ  
なかったものの、鐮木勢岐氏・日置謙氏らはみ  
なこれを見たうえで「東洋漂流記」を利用した  
ものと考えられたので、その検討をシンポジ  
ウムの準備報告の中では行っている。今回この  
論文をまとめるために資料を見直したところ、  
市史編纂室のリストに銭屋慎八船とあることに  
あらためて気づいた。市史編纂室で撮影してい  
るかどうかも不明であるが、また収集資料を点検  
しなおさねばならないものの、編纂は終わり現  
在それらはまだ公開されていないので残念な  
がら点検できない。五兵衛の持ち船でないのに持  
ち船として漂流記をまとめたとは考えにくいも  
の、念のために別の船を五兵衛船とした可能  
性を考えることにして本稿では本文で利用しな  
いことにし、その公開後に直ちに点検、紹介す  
ることにしたい。もっとも、「東洋漂流記」が  
たとえ五兵衛の船でなくとも幕末の宮腰の廻船  
が昆布を積んで東廻りをしたことを教えてくれ  
る点で貴重な史料であることに間違いはない。
- (48) 前註1 示村龍「銭屋五兵衛の密貿易」。最初  
の宝得丸は天保2年に新造され、その後3代目  
の船まで知られている(前註1, 鐮木『銭屋五  
兵衛の研究』71-74頁の持ち船表参照)。
- (49) 長崎県立図書館蔵「犯科帳」123。「皆月村弥  
三兵衛異国へ漂着の次第口書」(石川県図書館  
協会編刊『加能漂流譚』1938年)。この一件に  
ついては拙著「海外漂流からみた北国, 日本海  
東部沿岸地域の廻船の動向と航海」(細井計編  
『東北史を読み直す』吉川弘文館・2006年)も  
参照。
- (50) 川合彦充「近世日本漂流編年略史」(『日本人  
漂流記』1967年・社会思想社)・佃和雄『新能  
登・加賀・漂流物語』(北国新聞社・2006年)  
5章4
- (51) 前註1 示村龍「銭屋五兵衛の密貿易」が推  
定するがこの点の確実な史料はまだ未発見で

ある。

- (52) 若林氏は天保7年頃に五兵衛が越中米の取引を主とする米商いをやめることにしたことを指摘しているが（前註1 若林『新版銭屋五兵衛』4章4）、領外での米買い付け、販売は領内細民の恨みを買うわけではないので、当然に対象外である。
- (53) 天保4年の飢饉時の筑前米・中国米買い付けと販売の記事が『年々留』（前註1 掲載）上巻85項に記載される。
- (54) 前註1 若林『新版銭屋五兵衛』4章4
- (55) 拙稿「加賀地域の北前船展開と抜荷」『歴史と地理（日本史の研究）』210号・2005年
- (56) 拙著「近世、能登黒島の廻船業発展と新潟廻船問屋当銀屋」『交通史研究』57号・2005年
- (57) 前註1，鍋木『銭屋五兵衛の研究』
- (58) (59) 拙著「近世後期，加賀藩の抜荷取引湊の廻船問屋展開と富山売薬商の抜荷売買」『富山大学教育学部紀要』53号・1999年
- (60) 前註8『輪島市史』資料編2（輪島市・1972年）新谷九郎家文書解説と同史料編4巻（同・1975年）「近世町方文書解説」参照

追記、本論文は2001年に実施された銭屋五兵衛没後150年記念シンポジウムでの報告を大変に遅ればせながらまとめたものである。論文化するのが遅れたのは、シンポジウム後に他の仕事に追われてようやく論文にまとめようとしていた時に、加賀藩の天保期の唐物投機失敗の一次史料を見だし、藩と抜荷の関係を検討するために史料発掘に努めていたためであるが、結局未だ他の関係史料を見いだせなかったのが、今回まとめることにしたものである。なお、北方関係の取引の部分については、先に活字にした拙著「加賀地域の北前船展開と抜け荷」（『歴史と地理（日本史の研究）』210号，2005年）の四節にて簡単にふれたが、今回これを詳しく取り上げた。

末筆ながら史料閲覧その他でお世話になった方々に御礼申し上げたい。